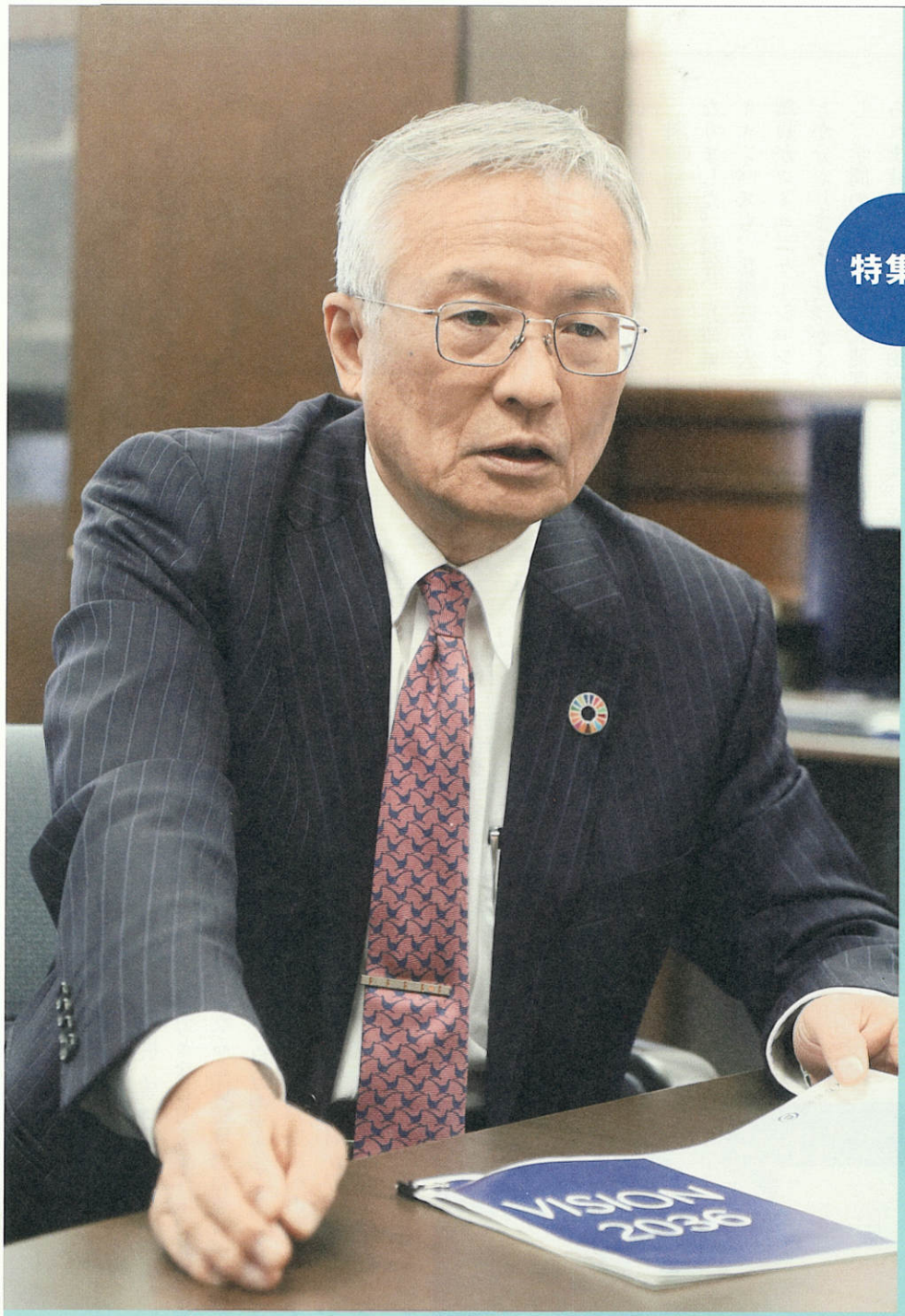
特集1

高坂誠学長インタビュー

改革の原点は「実学の商大」

Interview with University president Makoto Kosaka

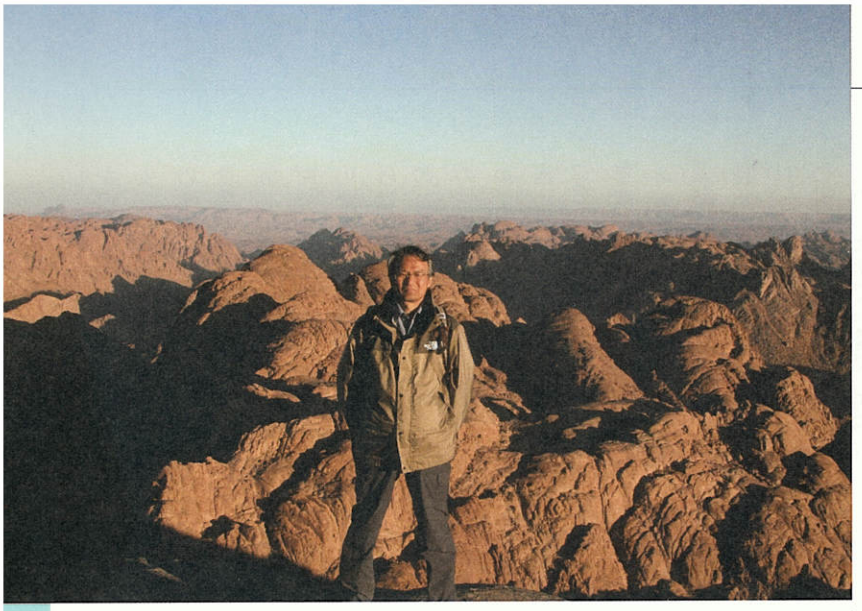


旧神戸商科大学出身の教員として初めて兵庫県立大学のトップに立った髙坂誠学長（2023年4月就任）は、副学長時代から商大の流れを汲む国際商経学部と社会情報科学部の開設を主導するなど、大学改革のリーダーとして学内外の信頼を集めてきた。学長として改革の先頭に立った今、「実学の商大」として産業界から高く評価された伝統を現代流に受け継ぎ、社会の即戦力となる人材を輩出することに力を入れているという。少子化やグローバル化を背景に大学を取り巻く環境が厳しくなる中、県立大の現状や改革の方向性などを聞いた。

髙坂 誠（こうさか まこと）略歴／1952年生まれ。80年3月、京都大学文学部史学科現代史学専攻卒業。83年3月、同志社大学大学院文学研究科新聞学専攻修士課程修了。松阪大学政治経済学部専任講師・助教授を経て、93年4月から神戸商科大学助教授。2012年4月兵庫県立大学副学長、23年4月から現職。

■聞き手
「淡水」編集委員
古根川 淳也（学部49回）
杉本 靖（学部41回）

世界から学生、「橋かける人」育てたい



ご出身やこれまでの研究内容などを教えてください。

生まれたのは落ち武者伝説が残る中国山地の山懐に抱かれた14軒の小さな集落でした。大学は自由の気風に憧れて京都大学文学部史学科で今津晃先生（アメリカ史）の指導を受け、ヨーロッパのユダヤ人問題とシオニズムの歴史を研究しました。

学生時代は1913（大正2）年に建てられた京大吉田寮に入っていたのですが、自由を謳歌しすぎて7年間もお世話になりました（笑）。この寮は学生が自主管理していて、政治闘争は認めないという方針の下、左翼の過激派から右翼まで、いろんな考えの持ち主が一緒に生活していました。そこでは多様な学生が切磋琢磨しながら互いに自己をぶつけ合い、新たな飛躍の契機を見いだしていきました。開業医を継ぐことを考えていた医学部の学生が、政治学を学ぶ学生に触発されて国境なき医師団に入る、というようなことが起こりました。

その経験が原点にあったので、私が県立大副学長としてGBC（国際商経学部グローバルビジネスコース）を立ち上げた時に、知事に掛け合って学生寮を作ってもらいました。さまざまな国籍、人種、宗教、文化を持った人が一緒に生活するというのは得難い経験になる。壁を作る人ではなく、橋をかける人を育てようと思うと、多様性のある環境が必要です。

GBCは京大吉田寮がモデルなんですね。

吉田寮も一つですが、ハーバードもオックスフォードもケンブリッジも、学生はまず寮に住まわせる。世界中から集まった国も言葉も違う学生と教員が同じ釜の飯を食って、お互いを知り合う。多様性というのは力です。その学生たちがまた世界に散らばって組織のトップに立ち、ネットワークを作る。ただの友達ではなく、一緒に生活したという絆は大きい。

モーゼが神から十戒を授かった場所とされるエジプトのシナイ山山頂。中東の平和構築に関するベツレヘム大学等との国際共同研究の一環として聖地エルサレムに調査に出かけた際、足を延ばした（2008年2月）

1993年から神戸商科大学で勤務していますが、どんな講義や学務を担当しましたか。

授業は政治学と国際関係論を担当しました。部活動の顧問はほとんどやってないです。学務ではコンプライアンス対策を担当し、県立大になって以降の教員によるパワハラやセクハラ事案にはほとんど関わりました。弁護士事務所にも行くし、入試ミスがあれば記者会見で頭を下げる。そういうしんどい部分を引き受けてきたから、社会情報科学部の新しい校舎を建てる時には教室や研究室をガラス張りにし、外からの視線が届くようにしました。学生と教員を守るための工夫です。

商大に着任してから2度、オックスフォードに滞在する機会を得、二つのカレッジと附置研究所で研究生活を送りました。三つの機関に所属していたおかげで、オックスフォードには多くの友人や研究者仲間がいます。この大学のネットワークはやはりすごくて、僕の隣の席で勉強していたのがヨルダンの皇太子だったりする。中東の平和構築について水面下の仕事を依頼されることもあり、イスラエルやPLO、国際機関などにも知人がいますが、こうした話は表にだせません。

2019年の社会情報科学部と国際商経学部開設に合わせて神戸商科キャンパスに建設された情報科学研究棟（右）と国際学生寮

2015年に私学に移りましたが、県立大の改革が止まっているから戻ってこいということになり、2年で副学長として復帰しました。そこで出した改革案が、GBCがある国際商経学部と社会情報科学部の創設です。商大の伝統として国際商学科と管理科学科がありましたが、今の時代が求める形にすればグローバルとデータサイエンスになる。全部英語で授業をするGBCと、日本で3番目のデータサイエンスの学部を作ろうと、学内で55歳までの若い人を集めて新学部の設置委員会を設け、1年で計画をまとめました。

両学部の1期生は昨年卒業し、総合商社や国家公務員総合職にも採用されています。どのような授業を行なっているのですか。

社会情報科学部の1期生は就職率が100%で、初任給が30万円以上という人

が何人もいます。社会にデジタル人材が少ないという事情もありますが、県立大の学生はプログラムを組めるだけでなく、企業の現場で生のデータを扱う実習を経験しているので、何が大事なのか価値判断できます。企業としては使い勝手がいいでしょう。例えば実習でスーパーに行けば、売り上げの数字を扱うだけでなく、どの棚が売れているかといった現場の生の情報を見て、売り場をどう変えるべきかまで踏み込んで提案します。企業と一緒に研究して課題解決策を提案してきた「実学の商大」の伝統が生きています。23年度の入学模試の偏差値はデータサイエンスで先行した国立大の学部より高く、志願者が前年度より増えています。情報科学の基礎をなすアルゴリズムの分野では、本学教員の科研費（日本学術振興会の科学研究費助成事業）の新規採択数が国内の大学で一番でした。

GBCでは4年間すべての授業を英語で受けます。1回生の間は国際学生寮に入り、世界中から集まった留学生と共同生活します。海外の提携大学が三十数校あり、交換留学や海外企業でのインターンシップも経験します。卒業論文も英語で書き、学生は英語に不自由しなくなります。商大は即戦力として就職に強かったですが、GBCはその強さを新しい形で構築したものです。

国際商経学部の経済学コース・経営学コースの学生も、GLEP（グローバルリーダー教育プログラム）という副専攻を選べます。こちらは2ヶ国語の習得と海外研修が必修で、世界のどこかに行かなければならない。キャンパスが離れた理学部や工学部の学生も履修でき、総合大学の強みを生かした異分野融合の課題探究的なゼミを2、3回生で行なっています。

国際学生寮1階の国際交流センターで自習する留学生ら。寮の公用語は英語で、国際商経学部グローバルビジネスコース1回生の日本人学生と外国人留学生は4人1ユニットの居室で共同生活を送る

海外企業で職場実習／批判的知性や教養も重視

大学は少子化などで淘汰の時代を迎え、社会もデジタル技術の急速な進化で変化が激しくなっています。今後、どのような大学改革や人材育成を目指しますか。

AIの進歩でかつてのSF映画のような社会が現実になってきました。このような時代に必要なのはフェイクを見抜く批判的知性や、創造する知性です。教養や、おかしいものはおかしいという倫理観、他者に対する共感力もなくてはいけない。そうした力を養うには、授業のやり方を変える必要があります。ハーバードもオックスフォードも、授業の資料は学生が事前に読んで、それについて議論するアクティブラーニング（主体的・対話的な学び）が主流です。例えば農村崩壊をどうするかという問題を、経済・経営の視点から考えていく。学生が参加する課題解決型の授業を増やすことで創造性が養われます。

GBCの学生には全員、海外インターンシップを経験させたいと考えています。県内の企業でも東南アジアなどに工場を持つ会社は多くある。そういう現地の工場に学生を送り込み、現地の社員と同じ生活をする。1ヶ月もいれば人生観が変わるはずです。留学先で勉強するだけでなく、企業の現場に出ていくインターンシップで「実学の商大」の実践的な学びをさらに強化していきます。

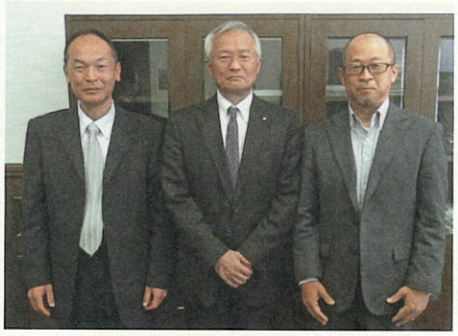
海外の提携大学も最低でも50校まで増やし、学生の選択肢を確保したい。また、EUの大学に拠点を設け、サテライトキャンパスのようにしたいと思っている。そこに学生を送り込み、こちらも学生を受け入れ、一緒に授業を作って同じ課題やプロジェクトに取り組むというようなことをしたい。DXやGXの分野での共同研究や社会実装も視野に入れています。

「後戻りできないところまで変える」

卒業生へのメッセージがあればお願いします。

大学を想ってくれる人がいるのは私たちのエネルギーになる。これまでも、卒業生にプライドを持ってもらえる母校にしたいと思ってやってきた。大学に対する経済的支援だけでなく、良き先輩を目標に歩んでいくであろう後輩たちにも手を差し伸べていただきたい。

学長任期は4年しかない。最後の1年はレームダックになることを考えれば、残り2年でどこまで改革できるかシナリオを書かないといけない。僕の性格からして人の後を追いかけるのは嫌。世界水準を目指してもっととんがり、後戻りできないところまで変えていこうと思っている。



（左から）古根川編集委員　髙坂学長　杉本編集委員